魚と水　Uo to Mizu (44)：15-17, 2008

石狩川ヤツメ文化保全再生事業を担当して
～行政職員の立場から～

近藤章二

皆さん、水産孵化場総務部企画室の近藤です。平成19年6月から“縁あって？”石狩支庁水産室から異動してまいりました。よろしくお願いします。異動当初は慣れない仕事が多く、ストレスを解消するために札幌で途中下車し、ネオンの町に消えていくことも多かった(某N主査やM主事に目撃されました)のですが、ようやく、仕事にも慣れて、持ち前のガッツでがんばっています。

冒頭に“縁あって？”と書きましたが、石狩支庁在勤時にもヤツメウナギに関する仕事をしていたのです。この仕事はやはり“縁あって？”職場を同じくすることとなった三林昭夫総務部長と石狩支庁在勤時に予算化したもので、予算化の時のお話しは三林部長から紹介されています。私が歩んできた水産畑の経験では、海で捕れる魚の水揚げに比べてとても少ないヤツメウナギの予算なんてどうしてつけたらよいのか全く及びもつきませんでした。しかし、現場で江別や石狩湾漁協のヤツメ漁業者の実態を見たり、江別市役所からの陳情を受けて何とかしなければならないという気持ちが日に日に大きくなってゆきました。

当時、私の上司の水産室長職にあった三林部長から漁獲量ではなく、「文化」と言う言葉を前面に出してはどうかというアイデアをいただきました。ヤツメウナギ漁業が衰退することによって江別市の「ヤツメウナギ祭り」が開かれなくなった事実、ヤツメウナギに関する食文化が失われて行く状況から事業を組み立てて、事業が採択されることとなりました。このことは前述のように水産畑で仕事をしてきた私にとって「目から鱗が落ちるような」衝撃的なことでした。さらにもう一つ、新年度早々に三林部長が異動することになり、これからこの仕事をどう続けていったらよいのか、少々、心細いことでした。

ここで、話が飛んでしまうのですが、私が道職員となったころ、水産孵化場の独身寮に入っていました。そこには初代の内水面資源部長となった今田和史さんもおり、私的なお付き合いもしていました。私は人とのつながりを大事にしていますので、このつながりを利用しないはずはありません。今田さんの知恵と力を借り、また、それまで水産孵化場のヤツメウナギの窓口であった中島美由紀主査が構築された北海道工業大学や酪農学園大学、北海道大学の各大学と北海道栽培漁業振興公社を加えて、ヤツメウナギが減少した原因の究明を行う調査体制を作りました。さらに、これら機関の事業運営や調整を行う「資源増殖技術検討委員会」、漁業の調整を目的とした「資源管理技術検討会」、一般住民に方々に文化の啓蒙をする「ヤツメを考える会」を開催することにして、形ができあがってきました。

「ヤツメを考える会」の中では、一般住民の方々にはヤツメウナギを食べることも見ることも稀になっている現在の状況から、ヤツメウナギがどのような生き物であるのか、食べたらどのような味がするのかをお知らせし、説明する機会を設けようと思いました。生態やふ化技術に関することは水産孵化場内水面資源部の笠原昇主任研究員や楠田聡研究職員にお任せすることとしても、ヤツメウナギの味については、私自身まずヤツメウナギを実際に食べてみて自分で理解しなければいけないと思いました。江別市野幌にある料理店

図1　ヤツメウナギ蒲焼き（上段）と乾物（下段）

「小島」は今では数少ないヤツメウナギ料理を食べさせてくれる店です。尻別川河口にある魚屋さんでヤツメウナギの干したのが並んでいたのを見たことがありますが、北海道でもヤツメウナギ料理のメニューがこれほど多いのはここだけだと思います。ヤツメウナギと言えば蒲焼きがすぐに思いつきますが、それだけではなく、串焼き、煮付け、そして私の一番のお薦めは刺身です。歯ごたえと言い、脂ののり具合と言い、私の大好きな焼酎の肴にはとてもあいます。皆さんもご賞味いただければと思います。

話が少々横道にそれましたが、私自身も勉強しながら「ヤツメを考える会」以外の啓蒙活動を行っていくことを企画しました。北海道の「赤れんがチャレンジ事業」という事業の中で江別市の高齢者教養講座である「蒼樹学園」、「聚楽学園」でヤツメウナギについての講演をすることとして、演者として水産孵化場の笠原主任研究員を引っ張り出しました。笠原さんも最初は多忙を理由に渋っていたのですが、私の粘りで承諾してもらいました。私の場合、最初、皆さんは無理だとか仰っているのですが、最後には「近藤さんなら仕方がないなぁ。」と引き受けてもらえることが多いようです。これも誠意と粘りを相手に示して行くことで理解してもらえるものと思っています。

「蒼樹学園」では言い出しっぺの私も「ヤツメ文化保全再生事業の説明をすることとなり、5 分間ほどの時間をいただきました。当時、内水面資源部長の今田さんと主任研究員の笠原さんに原稿を見てもらったところ、自分では 5 分も経たずに話が終わってしまうと思っていた原稿に対して、二人は話し終わるのに 30 分以上もかかると言う意見なので、大分文章を削って当日に望みました。予定では私が 5 分間ほど話して、その後、笠原さんのヤツメウナギの生態の話に続ける予定でした。話し始めたところ、徐々に口も滑らかとなり、調子が良くなってきて、聞き手の人たちの反応も良く、笑ってくれたり、拍手があったりととても気持ちよく話を終えました。途中で笠原さんの視線も気になったのですが、終わってみるとなんと 25 分間話し続けていたとのことでした。しかし、ここだけの話ですが、笠原さんより私の話の方が聞き手の方には受けていたような気がします。今度また、そのような機会があったときにはぜひ私の方にお任せ下さい。

図 2　聚楽学園で緊張の中、講義する私

このようにヤツメウナギのことでかけずり回っていると、いつの間にか石狩支庁の中では私のことが「ヤツメおじさん」と呼ばれるようになりました。気恥ずかしいような感じですが、これも私が精力的に動き回った結果、ヤツメウナギや「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」の認知度が高くなったと言うことであればこの仕事に関係した皆様方の努力が報われたわけで、大変喜ばしい限りだと思っています。

一年、そして二年と調査を続けるうちに調査に携わっていた北海道工業大学、酪農学園大学、北海道栽培漁業振興公社、流域生態研究所、そして北海道立水産孵化場の調査結果が報告され、ヤツメウナギを取り巻く環境の変化が明らかになってきました。石狩川では 5 月から 7 月の産卵期には上流にある産卵場を目指してヤツメウナギが川をのぼって行きますが、飛び越えることの苦手なヤツメウナギにとって障害となる施設が多くできていること、生まれたアンモシーテス幼生が住むのに適した泥場がいくつかの原因で少なくなっていることなどがわかりました。酪農学園大学が空知支庁管内の採捕従事者を対象として行ったアンケート調査でも昔に比べてヤツメウナギが減っていると感じている人は約 9 割にのぼっており、減った原因もこの事業の中で行った調査によって裏付けられたものとほぼ同じことがわかりました。さらに、私にとって衝撃的だったことは回答者であるヤツメウナギの採捕者の 7 割近くが 60 歳代以上であることでした。このままではヤツメウナギをとっていたことが昔話となってしまうとヤツメウナギの再生に意を強くしたものでした。

この間に、講演会の開催の他に、このような調査結果をまとめた報告書を二部、小冊子を一部、出版するお手伝いをいたしました。事業の報告書などは慣れたものですが、それとは勝手が違い、大変手間取りました。なかでも、子供たちが授業の中でヤツメウナギを学ぶための副読本となるような冊子「石狩川水系のカワヤツメ」の編集をしましたが、私が慣れないこともあって、大変苦労いたしました。これには酪農学園大学の村野紀雄先生そしてその研究室の学生さん、さらに卒業生の方々が中心となり、内容をまとめていただきました。おそらく睡眠時間を削って編集をされた村

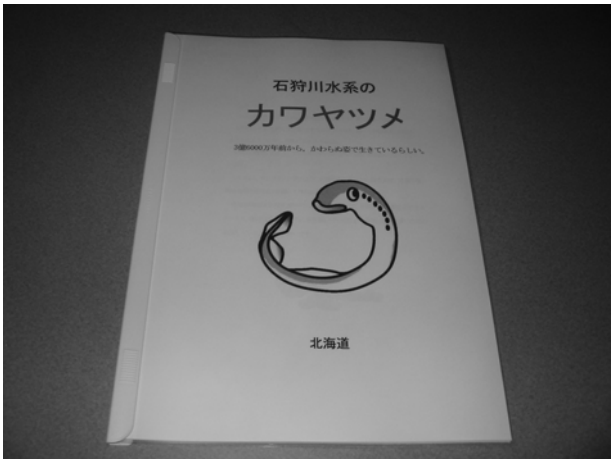

図３　完成した「石狩川水系のカワヤツメ」

野先生には大変感謝をしなければならないのはもちろんですが、学生さんの中には表紙の写真にあるようなヤツメウナギのキャラクターを書いてくれる人がいて、これには感激いたしました。現物のカワヤツメはどちらかというとグロテスクな格好をしていますが、かわいらしく､親しみやすくできあがっており､これなら、この本を見る皆さんは興味深く見てくれると思いました。そうこうしているうちに印刷を発注するタイムリミットも迫り、編集は時間との戦いとなって完成間近には大変忙しい思いをしましたが、できあがったときには感慨深いものがありました。

私は幸運にも「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」を始めから終わりまで三年間担当することができました。この仕事はこれまで私が担当してきた仕事とは少々趣が異なり、手間取ったことは事実ですが、得るものも大きかったと感じています。一つは漁獲量の大きいことが予算獲得の必要条件であったことを打ち破れたことと、もう一つは調査に参加した多くの人々と知り合えたことです。特に学生諸君は私の息子たちも同年代であり、親身になって、時には就職のことまで話をしたこともあります。「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」では問題点を指摘し、ヤツメウナギ再生に向けての方向性を一部示すことができました。この事業の中からヤツメウナギの研究をしようと言う若者が育って行きつつあるあることもうれしいことの一つです。

しかし、ここ数年４トン弱で低迷しているヤツメウナギの漁獲量を回復させて行くのはこれからの仕事です。ヤツメウナギが親になるまでに長い年数がかかることを考えると資源を再生させるためには多くの時間が必要と考えられます。これから、この仕事から育って行った学生諸君がヤツメウナギ資源の回復に必ず貢献してくれるものと期待していますし、私もこの体験を生かして、水産孵化場と北海道民の方々の橋渡し役を担って行きたいと思っています。「ヤツメの資源を再生させるためには多くの時間が必要」と書きましたが、この三年間でできた人の輪が「ヤツメの資源再生」を加速してくれるものと信じています。

参考文献

北海道（2005）．石狩川水系ヤツメ関連調査資料.
北海道（2006）．石狩川水系ヤツメ関連資料.
北海道（2007）．石狩川水系のカワヤツメ.
北海道（2007）．ヤツメの現在そしてこれから.
三林昭夫(2008)．ヤツメ予算の想い出話．魚と水，44，13-14.

（こんどう　しょうじ：総務部企画室主査）

お　知　ら　せ

平成16年から平成18年にかけて実施しました「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」で行われた調査の結果をとりまとめた「ヤツメウナギの現在そしてこれから」が刊行されました。本体は約300ページほどでCD1枚の中にpdfファイルとして収められています。

この内容について詳しく知りたい方、あるいはヤツメウナギについてのご質問等がある方は次にご連絡下さい。

連絡先）〒061-1433
北海道恵庭市北柏木町３丁目373
北海道立水産孵化場内水面資源部
主任研究員　笠原　昇
電話 0123-32-2137
E-mail:kasaharan@fishexp.pref.hokkaido.jp